

海外研修報告書

研修者 海老塚耕一

研修先 103日間の船上及び寄港地

研修期間 2009年12月28日から2010年4月9日までの103日間

「水と風」、そして「境界・限界・端」について考えるため、100日余りの船の生活を選んだ。安住の地である日常から一歩踏み出し、今までと異なった時間、光景を日常とすることにより、「境界・限界・端」を確かに感じ、思索し、さらに自分の身体で受け止めるプラクティスの時間とした。言葉を紡ぎだし、そして、言葉の外にあるもののかたちを見いだす場として船上での生活を選んだ。

「荒天減速航行をする船の不規則な揺れによって、《われ》は生への希望の窓から、外に押し出されたり、内に引きずり込まれたりする。私は内におり、また外にいる。」とミッシェル・セールは『五感』（法政大学出版局）で記している。そう、まさにさまざまな、そして多種多様な危険や心の怯えから脱したとき彼は《魂》を持つというのだが、今、自らが必要としているのはそんな《魂》のひろがる意味である。そのためには非日常的な場所を日常として経験することが、つまり、研究室や大学、そして日本の光景から積極的に逃れ、場としての特殊な場、つまり眼差しの行方がこれまでの経験では得られないそんな場を持つ必要があると考えた。内であり外である場と、見るものであり見られるものである私、触れるものであり触れられるものである私といった対峙のなかで思索を進めることが、今後の自らの制作・研究に有意義と考え、まさにその意味では今回の研修で得たものは大きかった。

さらに「水と風」、「境界・限界・端」を考えるにあたってもうひとつのキーワードは道であり、風景である。また、風景や道を考えるときに有効なものは、はてしない砂漠-世界最古の砂漠ナビブ砂漠であり、氷に閉ざされた領域-南極である。このような等質的な領域には新しいものの出現を見ることはないけれども、都市の文明のなかで暮らす私にはそれこそが新しく、また風景の意味を探ることにもなった。なぜならばそれらの場所に、道が出現することをその現場に佇むこと無しには理解できないと考えたし、それらの風景はきっと道の出現を拒んでいると思えたからだ。しかしその場との時間は、私に「境界・限界・端」の豊饒な世界の確実な存在を開示してくれた。

ところで、ひとつの繋がりが結ばれた時間のなかで、未知の哲学や表現を発見しようとする試みは、その思索がたとえ失敗しようとも必ず新たな思索を編み出す。このような考えは常軌を逸していると思われたとしても、今の私にとってはこの航海こそが、これまでの私から未知の私への飛躍となる場であった、といえる。そんな船上で思索し描いたドローイングと彫刻の構想は、4月に開催したギャラリーQにおける個展『雀蜂の飛翔のように-海、氷に閉ざされた領域、そして砂漠より』において106枚のドローイングと、一点の彫刻として結実した。また、日々の思索、出来事等は何かしらの事情がないかぎり、ギャラリーQのホームページ上で「空と海が一線となった場所-境界から」として発表した。http://www.galleryq.info/news/news_ebizuka.html





